

明治の佐伯三青年（三十七）

— 龍溪・鳴鶴・鶴谷 —

御手洗 一 而

（賛助会員・川越市小堤）

茂吉の死（その二）

政争は休止がなかった。暑い夏の間でも、第一議会で野党の攻勢にこりた政府は、政府系の議員を増員して野党の切り崩しを計り、来る第二議会の対策にとりかかっていた。自由・改進黨はそれぞれに結束を固めてはいしたが、幹部達は次に政府が如何なる手を打つか懸念していた。

第二議会が十一月二十一日に招集されると發布されたのは、十月八日であった。

ここに至って、さき同志の変節に憤慨して院を去つた中江兆民は、自由党と改進黨の別個の行動は国家に利なしとして、結合のためにも、自由党総理板垣退助と改進黨を牛耳る大隈との会見を画策した。

十一月八日、板垣は大隈を早稲田の私邸に訪ね、時局の非を説いて、先ずは両党の公式なる提携を約束した。

ところが、これが政府の思う壺であった。二人の会見は政府を刺激した。松方は、かりにも枢密院顧問官の要職にある大隈が、在野党首の板垣に会うとは不見識も甚だしいと非難し、大隈を辞職させた。大隈は官職を離れてせいせいしていたが、これが却って両党の反政府の氣勢を上げさせたから皮肉である。こうなると、政府系の大成会も分裂する有様で、松方内閣の前途は開院前から暗澹たるものであった。

松方首相は、第二帝国議会の劈頭、「政府は、この二三年歳計よろしきを得て、相当の余裕を生じた所から、この余裕金を利用して、従来計画ばかりで着手することの出来なかつた重要な事業を起こさんとする」旨の施政方針と新予算の説明を試みた。

政府は、国防の充実、鉄道の国有、製鋼所の設置、治水事業等の積極主義をとり、歳入八千六百余万円、歳出八千三百五十余万円という予算案を提示した。

これに対して、野党は待つてましたとばかりに噛み付いた。歳計のよろしきは、野党のとつた削減政策による

もので、不急の事業よりは、民力の休養に資すべしと反論し、前議会予算委員会の査定方針により、歳入に五十余万円を増し、歳出に七百九拾余万円削減案を予算委員長松田正久に報告した。

蔵相を兼任する松方は、切り詰めるだけ切り詰めたこの予算案が最善のものとして、削減の意志のないことを主張した。まさに正面衝突である。そして野党も意地でも査定案を可決したから騒動になった。

海軍大臣樺山資紀は、海軍拡張や製鋼所設置の諸経費を否定された腹いせに、自らの立場を主張し、大胆にも今までの薩長政治の功績を称揚し失笑に及んだが、査定案については、言いたい放題の暴言を続け、議長の制止も聞かず、あわや乱闘騒ぎになりかけて下壇した。

これに対して、島田三郎が反駁して政府の不信任を表明したが、万策つきた政府は非常手段を考えていた。今日あるを予想して予定の行動であったのかもしれない。十二月二十五日、衆議院の予算案議了を待って、即夜解散の詔勅を伝達した。当初の議会運営は、全く子供じみた喧嘩の結末であった。政府は議会の何たるかを知らず議員を見下ろし、議会も民意を反映する代議政体の形を

とらず、どちらかといえば、政府いじめの積年のうさ晴らしにすぎなかった。野党が予算の削減を主張しながら五十余万円の歳入増加を修正するとは論外であるが、維新以来の怨念がそうさせているとしか言いようのない幼稚な議会であった。

藤田をはじめ改進黨や自由党の議員達は激怒した。議会の意向を全く無視して、政府は一枚の詔書によって勝手に解散するという強硬手段に出たが、これが政府の奥の手であった。反発する両党は却って結束を固めたが、議員の数で苦汁を飲ませられた政府は、この時次の選挙干渉を考えていた。解散前からの予定の行動であったのかもしれない。

この頃の藤田は、かなり病勢が進み、気ばかり焦っても活動できる状態ではなかったが、この大事な時に身を退くわけにはいかなかった。来るべき臨時総選挙に向けて、全国の党員に檄をとばし、わが身を振り返る暇さえなかった。

こうして、衆議院の臨時総選挙は、明けて明治二十五年の二月二十五日に行われたが、時の内務大臣品川弥二郎は次官の白根専一と謀って、密かに地方長官に訓令を

出し、政府反対の候補者を妨害させた。松方首相は見ぬふりをしてしたが、品川・白根は目的のために手段を選ばなかった。そのため、民党に投票する者は威嚇され、反発する壮士は警察と衝突し、無政府状態となった各地には、軍隊まで出る始末で、当日投票箱を奪われて選挙が出来なかったり、全国で二十五名の死者と三百八十八名の負傷者を出したというから、前代未聞の選挙であった。

幸いに藤田は再選されたが、その知名度と人望は、いかなる妨害も受けつげなかった。この時の選挙では、大分県では一区が元田肇から小野吉彦に代わり、四区が宇佐美春三郎から広瀬貞文に代わっている。

全国民の反発を買ったこの選挙の結果は、果たしてどうであろうか。自由党九十五名、改進黨三十七名、他に巴倶楽部二十名、合わせて百五十二名に反して、与党ともいべき純吏党は僅かに九十五名、無所属中立組を加えても到底民党の数に及ばなかった。

藤田はこの悪辣な政府の選挙干渉を許せず、「張本人の内務大臣品川弥二郎を弾劾せよ」と、改進黨から狼煙を上げた。自由党も同じであった。その上枢密院議長の

伊藤博文も、政府の干渉が余りにもひどいと非を唱えたので、さすがの松方首相も世論に抗しきれず、品川を罷免して、誠実温厚な副島種臣に代えた。また、当初からこの干渉を非難していた農商務大臣陸奥宗光も辞職したので、後任に河野敏謙が任命された。

この内閣改造を見てとった藤田は、「この機会に一気に松方内閣をつぶしてしまえ」とばかりに秘策を練った。そして、島田や河野等と諮り、政府が詔書を楯に職権を濫用して選挙権を侵犯するならば、こちらは内閣弾劾の上奏文を奉呈することを決した。こうして次の議会開会が待たれたが、この頃から藤田の体は気力だけではどうにもならず、病は遂に床に伏すまでに悪化していた。

第三回帝国議会は五月六日に開会された。

この日を待っていた藤田は、友人達の止めるのも聞か入れず、開院式に臨んだ。犬養や尾崎、箕浦が心配して止めるほど藤田の病は重かったが、藤田は言い放った。

「病に伏して名医が傍らに侍していても、死ぬ時はやはり死ぬのである。病が重くとも、なお一時間は椅子に堪えることが出来る。同志諸君の国事に奔走するのを見れば、わが心安んずる事が出来ぬ」

藤田ならではの言葉であった。

民権運動の闘士藤田が死場所として選んだのが議會であつたかもしれない。その後藤田は再度議會へ足を運ぶことは出来なかつた。

藤田の病は矢野の耳にも入っていたが、矢野は開會中の見舞を避けた。この頃の矢野は、宮内官という地位から思いつき、西欧諸国の君主の名言集ともいうべき言行録を編纂したく、その資料を蒐集し始めていた。後に、『西洋君主言行録紀要』としてまとめ、時の東宮嘉仁親王（後の大正天皇）に献上したものであるが、目的が目的だけに、『龍溪矢野文雄君伝』では、

今も僅に写本として一冊残っているに過ぎぬが、その内容が洩れると、一二の新聞では、頻りに讚嘆したことがあつた。

とあり、私も未だにお目にかかれないでいる。

藤田は床に伏しても議會の進行が気がかりであつた。藤田等が練つた内閣弾劾の上奏文は、当初効を奏したかに見えたが、地方議員からは、襟を悩まし奉るとのことである。この案は否決された。上奏案は否決され、政府はほつとしたが、次に出された内閣の責任を問う院の決議は可

決された。となると、政府は議會の一週間の休會を、天皇の大権に属すとして素早く命じた。これに怒つた野党は、政府がその手ならばと、再度予算案に難癖（くせ）をつけた。この予算案は兩院を往来したが、貴族院が上奏し、陛下はこれを枢密院に諮詢して一応の決着をみることになった。だが、これを承認しない衆議院は、貴族院に兩院協議會を開くことを申し入れ、その結果、軍艦製造費は削除し、震災予防調査會設備費は存続させることで折り合つた。こうして第三議會は六月十四日に閉會した。

矢野は折りを見て、一度牛込区市ケ谷佐土原町の邸に藤田を見舞つたが、時期が時期だけに政客が多く長居はしなかつたが、藤田は松方を追い込めず、しきりに悔しがっていた。

しかし、この松方内閣も第三回議會は乗り切つたが、内部崩壊を始めていた。これも選挙干渉の余波であつた。

最初は、岐阜・愛知兩県震災救災河川堤防工事費の疑惑について、内務大臣副島は調査のため兩県に役人を派遣しようとしたが、次官の白根が猛反対し、閣議もこれを了承したので、副島は立場がなくなり辞職し、国民の

怨府となっていた白根も世論に抗しきれず罷免させられた。続いて、新しく内務大臣になった河野敏鎌は、通信大臣の後藤象二郎と諮り、選挙干渉における地方知事の更迭を手掛けたが、有力知事は陸軍大臣高島鞆之助・海軍大臣樺山資紀に冤罪を訴えて頼った。しかし、河野新大臣が一步も退かなかつたので、高島・樺山も立場上辞職せざるを得なかつた。この夜、河野が改進黨出身だけに、大隈と河野の邸に爆弾を包んで送り届けられたという。こんな不祥事が続くと、松方も内閣を支え切れなくなっていた。そして閣内不統一の責任を負って、松方首相もまた辞職するに至つた。

これを知らされた藤田は、
「そうか。松方も罷めたか。出すべき膿は出してしまえ。薩長で内閣が組めなくなるわい」と、ほくそ笑んだ。

そして、次の首相は誰かと目を閉じて値跳みするようであつたが、薩長も考えた。

八月八日、内閣の顔ぶれが発表されて驚かされた。内閣総理大臣伊藤博文に並んで、山県・黒田・井山と、薩長のお歴々が列なつていた。

これを知つた藤田は、一瞬、「薩長も考えたな」と感じ、「つぶし甲斐がある」とも思つたが、一方矢野は、「福沢さんが言われた通り、そろそろ大隈さんの番がくる」と直感していた。

藤田はここまで見届けたが、急に容態がおかしくなつていた。矢野は藤田が危ないと聞いて駆けつけた。二人の間柄を知る客は自然に座を離れた。

「茂吉。元気を出さぬか」

藤田は矢野とわかつたらしく、細くなつた手を差し出した。

「矢野さんには世話になりました」

藤田の一言には万感の思いが込められていた。

「塾時代が懐しいが、あの漬物には参つたのう。それにしても報知の論戦はすさまじかつた」

「恩返しが出来なくて」

豪気な茂吉の目に涙が浮かんでいた。

「何を言う。議会でも頑張つた。よくここまで漕ぎつけたではないか。悔いはあるまい」

「もう少し見届けたかつた」

「よしよし。国のことは安心してみなに任せろ。いい方

向に向かっている」

藤田の頸がかすかに動いた。そしてもう一方の手を差し出した。

「佐伯に帰れなかった。よろしく」

今度は矢野が大きく頷いていた。

この夜は離れ難い矢野であった。

藤田は八月十九日、生涯の幕を閉じた。僅か四十一才の短い生涯であった。

藤田の死は、八月二十三日の郵便報知紙上で告知され、葬儀は二十八日、浅草東本願寺で行われた。葬儀は新聞界や政界に人望のあった藤田だけに盛大であった。最後の別れを告げる矢野の背中も泣いていた。そして、藤田を兄と慕い、のちに総理大臣を拝命する犬養毅は、藤田の死をいたみ、長い弔文を報知に寄せた。

藤田の短命は、壮烈な苦学が過ぎたのかもしれない。好きな酒量が災いしたかもしれないが、自らの知性と哲学を信じ、第二期明治維新の志士たらんとして欲するままに生きたその潔い生き様には、男子の本懐に突き進む男の美学として胸を打たれるものがある。

藤田の全容は犬養の弔文に語りつくされている。ここ

に全文を紹介してご冥福を祈りたい。

藤田は谷中（東京）の墓地に葬られている。

「光雲院釈聞鳴鶴居士」

合掌。

○嗚呼、是れ鳴鶴藤田君を葬るの日なり。

嗚呼、是れ我党の先進我社の先輩我兄事の為、鳴鶴藤田君を葬るの日なり、予豈筆を執るに忍びんや、夫れ死生命天の無情何為れぞ独り此の不遇の時に奪へる、寿天數か天の無情何為れぞ独り之を此の失意の境に奪へる、君享年四十有一にして、其の京に在る二十二年間の歲月は概ね患苦多くして歡樂少く、志愈よ大にして事愈よ乖ひたる苦境逆運の歴史なりき、始め君の慶應義塾に在るや、数年の間学資給せず、寢食安んぜず、困学苦攻、異日の志望を以て自ら慰る外、未だに曾て謂ふ所の歡樂たるものあらず、既にして頭角嶄然、三千弟子の中僅かに指を屈す、然れども其衆中に傑出したる所以のもの、不幸にも却て一生を挙げて苦境逆運の底に埋没する始めとはなりぬ、当時塾生の気風、官吏を賤み民業を貴み、自由民権の説を以て藩閥政府の反対に立てり、況や君夙に才識を以て称せられ、随て抱負甚だ大にして官吏たる

を恥ぢ、高賈たるを屑しとせざりしをや。

終に我報知新聞社の聘する所となりて其の主筆に任ず、時に年二十三、健筆縦横盛に民権自由の説を唱へて政府を排撃し、正論直筆毫厘荷借する所なし、故を以て屢々忌諱に触れ、新聞条例の設あるに及び首として禁錮の刑に処せられ、爾來藩閥の徒殆んど謀反人を以て待ち、轉軼不遇の境に陥ると雖も、之に由りて人民の元氣を振作し、政事の思想を發達せしめたる功績極めて多しと為す、君我社に従事する殆んど十六年の久しきに亘り、日々掲載したる論説記事数千篇の多きに上る、蓋し君が如く久しく一社に従事したるもの、我邦新聞紙の起りしより未だ曾て在らざる所なり、況や、十有九年の間、政事世界に馳騁して未だ曾て官祿を以て身を汚さざる者に於てをや。

改進黨の起るや、君同志を率ゐて創立の事に尽力し、爾來我党先進の地位を占めて内外の声望を繋げる、茲に十余年、其間諸州を巡廻し党務を参画し力を用ふる甚だ多し、然るに不幸にも志業は健康に相副はず、第一議會前後劇務に従事せしより、稍や健全を傷ひ、第二議會に及びては衰羸既に甚し、是の時に当り議會極めて多事

なりしを以て、君終に病を以て公事を怠るに忍びざりき、然れども若し夫れ議會解散の事、選挙干渉の事なかりせば、或は猶ほ免れしやも未だ知る可からず、選挙争競の際、重患の身を以て憤慨鬱勃の境に当り、僅に其の戦捷を得たるの日は病既に膏盲に入り、扁鵲の術と雖も復た奈何ともすべからざるの日なりき。

嗚呼、死孰れか悲しからざらん、然れども苦境逆運の中に一生を埋没したる、君が如きもの果して幾人かある、近年吾友小野君逝き馬場君逝き吉田君逝き、皆苦境逆運の中に一生を終はり、空しく其の患苦の实行墜涙の歴史を留めて、予輩をして長へに痛恨哀惜の情に禁へざらしむ、然るに天猶ほ之を以て足れりとせざるか、今は又君を奪ひ去り、予輩をして更に終天の恨を加へしむ、天の吾徒ひ歿する何ぞ夫れ慘毒なるや。

夫れ苦境逆運は志士仁人の自ら求めて就き自ら楽みて居る所、逝くもの復た何をか恨みん、然りと雖ども苦極れば楽を生じ逆極れば順に帰す、君が生涯既に幾多の苦境逆運を閲し尽、今や將に順運に向ひ楽地に入らんとして、而して終に其の事を見るに及ばず、豈悲しからずや、抑も今より数年の歲月は君が一生の志業に於ける九似

の一簣にあらざる、然るに天之れに年をかさず、多年の志業一朝にして泡沫に帰す、嗚呼、悲しい哉、然りと雖ども、君が多年国家に尽したる功績は遍く挙国人民の脳裏に入りて、以て無形の記功碑を成せり、君逝くと雖ども君が名は以て不朽に伝ふるに足れり、是れ聊以て君の霊を慰め、又以て予輩哀悼の情を慰めんか、嗚呼、此の経歴ありて此の不幸に終る、却て益々哀むべく益々惜むべき哉。

謹で君の行状を按ずるに、少時より最も文学の才に富み、郷校に在りて作る所の詩文既に誦すべき者あり、其の京に來り英学を修むるに及び、一時詩文を廢し覃志研鑽専ら政治經濟の書を修む、其新聞に従事するに及び好尚漸く變じ、暇あれば必ず和漢西洋の稗官小説詩歌文章、及び俗曲院本の類を博渉し、最も好んで義太夫を読み、其の文辞精妙の処は往々背誦して一字を遺せず、文を作る極めて快速にして始より構想を費さず、卒然机に向ひ紙を展れば筆足り意到り一篇直ちに成る、君交遊甚だ博く貴賤雅俗を問はず、然れども其のうち介然自ら持する所あり、少しく意に合はざれば必ず言ふ、言へば必ず再び意留めず、最も好んで書生を養ひ、前後十七八

年の間寄食するもの極めて多し、予即ち其一人なり、君諱は楨、字は士基、鶴谷山人、九臯外史、嗚鶴居士、皆其別号なり、著はず所数種にして、其の済民偉業録、文明東漸史の如き、共に続篇を著述するに暇あらずして終はる、終はるの日に至るまで精神平生に異ならず、予いま筆を執るに当り音容恍として猶ほ面前に在るを覚ゆるなり。(原文に別行、句読点、ルビなし)

明治二十五年八月二十八日

犬養 毅 謹記

昭和五十五年から書き始めたこの一篇も、いつの間にか十年を経過してしまいました。余り長くなりますので、この「藤田茂吉の死」を以って一旦筆を擱きます。その後の矢野文雄龍溪については、またの機会に譲ります。

この間、史談会の諸先輩の中には、すでに鬼籍に入られた方もおられます。ご冥福をお祈りしながら史談会にお礼申し上げます。